

## タイ奨学生3人 仙台育英学園高等学校を卒業



2月28日、プラティープ理事長、ペンワディー事務所長、里親事業部専属ボランティアの阿部佳代子さんの3人が仙台育英学園高等学校の卒業式に出席しました。3年前、仙台育英学園高等学校では、創立100周年と日タイ修好120周年を記念して、タイ国からプラティープ財団とシーカーアジア財団の奨学生3人を留学生として招聘することになりました。

この時、プラティープ理事長はウボンラット王女殿下に拝謁。貧困家庭の女子3人を留学する機会を得たことをご報告されました。3年の歳月が経ち、3人の卒業を王女にご報告したところ、日本側への感謝の盾を託され、これを式典会場にて加藤校長に贈呈いたしました。卒業式を終えて帰国したチャンヤヌットさん、スパニーさん、ジェンジラーさんの3人は、現在タイの大学進学準備の傍ら、財団で翻訳等の手伝いをしています。

3人の在学中、仙台育英学園高等学校関係者の皆様からはひとかたならぬご指導とご配慮をいただきました。日本での貴重な体験と充実した時間は、3人の今後の人生における大きな糧になることでしょう。本当にありがとうございました。



## 在タイ・スイス大使ら、プラティープ財団を訪問

3月29日、在タイ・スイス大使 H.E. Mrs. Christine Schraner Burgener 女史、およびスイスとリヒテンシュタインの国会議員5人がプラティープ財団を訪問し、スラム地域を視察されました。この日、プラティープ理事長ほか、サン副理事長、当財団職員、子どもたちによる歓迎会が執り行われ、園児がタイ伝統舞踊を披露。さらに、移動図書館やおはなしキャラバンの人形劇の実演のほか、モンテッソリー教育の指導法を取り入れて指導している教室を見学いただきました。その後一行は、地域住民たちの暮らしぶりや地域の環境などを視察されました。



## ハイチ大地震被災者を支援 200人がスラムで募金呼びかけ

1月13日（現地では12日）に発生したハイチの大地震では20万人を超える住民が死亡、30万人以上が被災するなど、今なお困難な状況にあります。そのため、プラティープ財団では2月14日のバレンタインデー、「クロントイ・スラムの人々の思いやりを『ハイチ』へ！」をスローガンに募金活動を行いました。

タイもインド洋大津波で同様な苦しみを体験してきました。被災後の生活の苦しさを知るスラムの住民にとり、これは決して他人事ではありません。高齢者、青少年、住民委員、スラム連合代表ら総勢

200人以上がスラム地区を歩いて募金を呼びかけました。

当日は UNESCO ンコク事務所に勤務するハイチ人の Ms. Marie Ouge Sylvaia さんも募金活動に参加しました。

募金総額は138,303バーツ（約40万円）にもなり、3月8日、プラティープ理事長が、セイブザチルドレン（英国）バンコク事務所の Greg Dury 所長らに寄託しました。当財団では、住民たちの思いやりが一日も早くハイチの被災者へ届くことを願っています。



# 「生き直しの学校」 チュンポーン校 モンテッソリー教育の教材製作



「生き直しの学校」チュンポーン校は、麻薬依存症、家庭崩壊、ストリートチルドレン、虐待などの問題に直面した青少年を、豊かな自然環境の中で更生する施設として開設されました。一般教育と職業指導を中心として、現在、40人の青少年たちが6人の教職員とともに社会的自立を目指して様々な活動に取り組んでいます。

そこで、当財団では、すでにスラム地区の幼稚園児の指導に取り入れているモンテッソリー教育の教材をチュンポーン校の青少年に製作してもらうことにしました。指導に使われる各教材は100種類以上に及び、教材1セットを揃えるだけでかなりの金額になります。そのため、当財団が運営に関っている幼稚園すべてに配布できるように各教材を独自に製作することになったのです。

教材政策トレーニングは、プラティープ幼稚園にモンテッソリー教育の指導法を導入したサシナン先生が講師となり、3月24日から27日まで行われました。特に数の勉強に使われる教材は細かい作業になりますが、今後、「生き直しの学校」チュンポーン校では、各教材の用途や効果を学びながら製作に取り組むこととなります。

以下は、教材政策を担当する2人の青年の声です。



## ●カムラー・サッタータイ (ニックネーム=ラー) さん

年齢21歳。「生き直しの学校」カンチャナブリ校にいるピロムヤー・サッタータイ (ニックネーム=ナン) の兄で、2人とも物乞いを強要されていたところを保護され、当財団の施設に入所しました。その後、カムラーさんは13歳の時にチュンポーン校に移りました。「今回のトレーニングに参加でき、園児のために役立つ作業ができることを大変喜んでいます。今まで見たことのない教材ばかりで作業に戸惑いながらも、自信を持って取り組んでいます。将来は、妹の近くにいることができるよう、カンチャナブリ校の農業職員になることが夢。また、大学を卒業できるよう勉学も励みます」

## ●アムノアイ・シーストーン (ニックネーム=レック) 君

年齢18歳。学校外教育課程小学部5年生として学んでいます。

彼も今回のトレーニングに参加できて、とても喜んでいます。

「充実した教材のある幼稚園に行ったことはないけれど、園児たちに役立つ完璧な教材作りに全力を尽くしたいです」



\*\*\*\*\*

【訂正】前号(82号)「スラム地区の模範的青年を表彰」(P-3)の中で、プラゴープ・サンプラディットさん(通称バウさん)を「彼女は…」とありましたが、「彼は…」の誤りでした。ここにお詫びして訂正いたします。

## 無国籍青年の嘆き 「タイ人なのに身分証明書もない」



「タイ人なのに身分証明書もない、僕の人生、どうしてこんなに苦しまなければならないのだろうか．．．」

中部ロブリー県生まれのパーツさん（本名サアート・プラチュムサーン）（21歳）は、この世に存在しない人間として生きています。両親は貧しく、日雇いの働き口を求めて地方を転々とする生活を余儀なくされていました。両親は、当時10歳だった彼を親戚に預けたまま、消息不明となってしまいました。幼少の頃から転々とした生活を送っていたため、就学する機会がないまま成長。やがてストリートチルドレンの仲間入りをして麻薬を常用するようになり逮捕され、少年鑑別所（バーンガルナー）に入所。

2004年に出所しましたが、保護者が見つからなかったため、鑑別所から「生き直しの学校」チュンポーン校に送られることになったのです。その後、皆と仲良くするように努力し、学校外教育課程で勉強。今は中学課程を学んでいます。勤勉で真面目な性格の彼は、スポーツを好み、心身共に健全な青年に成長し、グループリーダーとして様々な活動に関っています。

ところが、今年1月1日、思いもよらない出来事が起きてしまいました。激しい腹痛に襲われ、スタッフのバイクで病院に搬送される途中、大型バスと衝突事故を起こし、全身（特に肺）を強打、緊急手術を受けました。入院中に2回手術を行い、やっと施設に戻って来たものの、病状が悪化し、腸の手術も必要になりました。

入院中に彼を見舞う両親や親類は当然いません。さらに、タイ人としての証しである身分証明書もないのです。そのため、治療費は実費負担です。さらに、学業を修了しても正式な卒業証書が授与されることはありません。そのため、当財団では彼の将来のためにも両親を探して、身分証明書を発行できるようにしたいと思っています。

当財団では、2007年から専属弁護士が担当して無国籍者事業をスタート。タイ国内で生まれたものの、国籍が取得できず、出生証明書もないままにいる人々に対して必要書類が取得できるよう手助けをしています。昨年は24人（うち6人は「生き直しの学校」在籍）が出生証明書と身分証明書を取得することができました。

国籍取得までには、保証人探しやDNA鑑定など様々な課題があるのですが、法的に身分が認証された瞬間の喜びと人権の大切さを深く感じて取り組んでいます。



## オーストラリアNGOの支援で 『津波ユースセンター』建設がスタート



Mr. Peter Baines が代表を務めるオーストラリアの NGO 「Hands Across the Water」では、2004年12月26日に発生した大津波直後から被災者の救援活動に積極的に取り組んできました。また、同団体は現在、プラティープ財団が運営する『津波孤児センター』の活動も支援しています。

昨年は、オーストラリア人とイギリス人から成る会員のうち、23人がペップリー県からパンガー県まで800キロを10日間かけてチャリティー・サイクリング。1月26日に最終目的地のパンガー県にゴールインしました。この時に集めた募金は、津波孤児センターの建設資金として寄贈されました。

そして、今年1月18日から26日までの期間、ペップリー県からパンガー県まで Peter 代表と会員の総勢40人がチャリティー・サイクリングを実施。ゴールでは、子どもたちが笑顔で出迎えました。無事に到着された Peter 代表と会員の皆さんは、プラティープ理事長、パンガー県副知事、NGO 団体関係者、地域住民たちの歓迎を受けました。なお、今回の募金は『津波ユースセンター』の建設資金として寄贈されました。

センター』の建設資金として寄贈されました。

1月27日、建設が確定した『津波ユースセンター』の起工式では、僧侶が礎石を据える儀式を執り行い、プラティープ理事長ほか、「Hands Across the Water」の皆さん、NARTA (National Associated Retail Traders of Australia) の Spencer 副代表が参列されました。同施設は来年1月の完成予定です。「Hands Across the Water」の皆さん、本当にありがとうございました。

### Tom Wells 氏、遊園地に遊具贈呈 財団製作の遊具が高い評価

2月20日、米国人、Tom Wells 氏とご家族を迎えてフラット23-24 地区の遊園地にて遊具の贈呈式が行われました。氏は今から6年前にカンチャナブリ県バーンリージアの児童センターの建設を支援。その後、地方の学校でのコンピュータ室や図書室の建設にかかわってきました。さらに、当財団30周年記念冊子の印刷資金、「生き直しの学校」カンチャナブリ校の奨学金支援などにも協力いただきました。

また、当財団では、2008年8月31日の財団設立30周年を記念する事業としてスラム地区の遊び場に頑丈な遊具を設置することになり、財団の消防ボランティア隊員の職業訓練の一環として約30人の青年たちがトレーニングを受け、その製作活動を行っています。製作された遊具第1号は、財団の幼稚園に設置。遊びやすい遊具として子どもたちに大人気です。また、米国の大学 W.P.I. (Worcester Polytechnic Institute)からは毎年研究班が訪れています。今年1月6日から3月2日までW.P.I.の大学生3人とチュラロンコン大学の学生2人がチームとなって「安全な遊具の使い方」を研究。消防ボランティア隊員と頑丈で安全な遊具の製作について情報を交換しました。研究チームはバンコク都内や地方で様々な遊具を製作している工場を視察。その結果、当財団で製作している遊具は、非常に安全性が高いことが証明されました。当財団では、地域に寄贈された遊具が子どもたちや住民たちの健康を促進すること、そして、製作する側の青年たちの技術が向上していくことを願っています。



## 絵本づくり講習会を開催 教師と保護者ら70人が参加



2月24日、プラティープ幼稚園では教師や保護者を対象に絵本づくりの講習会を実施。今回の講習会では児童絵本の専門家、チーウィン・ウィサーサ氏が指導にあたり、教師と保護者の総勢70人が参加しました。

活動の目的は、子どもたちの創造力を育む絵本の大切さを保護者に理解してもらうこと、そして、教材の使用方をちょっと変えるだけでより充実した教育指導ができることを教師に知ってもらうことです。

午後には、教師と保護者がグループに分かれて、絵本づくりを実践。互いのアイデアを活かし、物語りを考案してから絵を描き、製本し、立派なオリジナル絵本を完成させました。

完成した絵本を手にした保護者たちは、自分たちの作品に大変満足していました。今後は、親子で、または家族で、互いのアイデアを活かしたオリジナルの絵本づくりに励んでいくことでしょう。

